――――――――――――――――――――――――

――――――――――書評――――――――――

Kirk M. Besmer, *Merleau-Ponty's Phenomenology* (Continuum, 2007, x+160p.)

能美孝啓

――――――――――――――――――――――――

本書の構成は大きく３つに分かれている。はじめに、フッサールにおける現象学を改めて考察することで、初期の主著である『知覚の現象学』におけるメルロ＝ポンティの現象学に関する研究の理解を深めている。次に、メルロ＝ポンティの中期における思想の変遷を辿っている。最後に、後期メルロ＝ポンティの思想を『見えるものと見えないもの』や講義ノートに基づいて探求している。

上述から分かるように、著者はメルロ＝ポンティの現象学に対する関心を３つの期間に分類して紹介している。実際のところ、メルロ＝ポンティの思想は単純に前期と後期に分けられることが多い。しかし、著者がこのような分類を採用したのは前期と後期にまたがる中期にこそ、メルロ＝ポンティの思想的発展があり、彼の思想に大きな変化が見られると推察しているからである。以上のことを踏まえ、本稿ではメルロ＝ポンティの初期から中期にかけての思想の転換を紹介していきたい。

さて、メルロ＝ポンティの中期思想は①政治的な著作、②絵画表現、言語表現といった創造的な表現に関する著作、③哲学と科学の関係についての著作に分類することができる。とりわけ、彼の中心的な現象学的関心について直接取り扱っているのは②と③である。そこで、著者はこの２つについて焦点を当てて考察している。

メルロ＝ポンティの主著、『知覚の現象学』は、近代の二元論を克服するために必要な行程となる新たな知覚論を打ち立てた。著者はその主な功績を、現在(present)と生きている実在(living reality)をより密接に獲得する方法を定めたことにあると述べている。知覚が現在と生きている実在を知るために特権化された場として重要であり、こうしたレベルでの経験は「始元的」(primordial)だと言われる。著者によると、この「始元」に対する問いがメルロ＝ポンティの基本的な哲学的関心に結びついている。始元とは、世界が私たちに意味を示す起源のことである。

始元の特徴は彼の思想の変遷と共に変化し、単に知覚レベルで操作する自然として理解されるものではなくなったのだが、始元に関する問題の転換は急に起こったわけではない。メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』の第２部で文化的な始元について、さらには間主観性に対する問題についても言及している。彼の間主観性の分析は、近世哲学にみられる主体‐客体間の厳密な区別を克服する。そして、彼は間主観性を説明するために、第三の存在として身体を持ち出した。身体や知覚の反省は、自分自身を完全に与し得ないことを示す。そのため、

他者の絶対的な所与が不可能であることが間主観性の障害だとみなすべきではない。むしろ、知覚世界において、身体は自-他の振る舞いを示しているのである。著者は、自我は他者の視線を認め、同じ対象を見るという行為によって他者に加わることができるため、他者と自我の知覚はそれぞれ完全に独立したものではないと述べている。また、自我と他者は世界を共有するのだが、この世界は前人称的であり、その世界は知覚の行為者が互いに構成することで獲得されるのである。

メルロ＝ポンティは、自‐他が構成する世界は「言活動」(parole)(対話や言語を用いたコミュニケーション)によって生じると考えた。そして、他者は対話において理性的な行為者になるとも考えた。更に、彼は間主観的な経験をより明確にするため、対話における他者の具体的な経験を記述する。間主観的な経験は人を文化的な世界の中に結びつけるのだが、彼はこの世界を「間世界」(intermonde)と呼んだ。

メルロ＝ポンティは、間世界における自-他それぞれの経験を共存と呼んだが、この共存には次のような疑問が生じる。「誰が間世界を構成しているのか。」この問題に対して、著者は次のように述べている。ここでの「誰か」には匿名性がある。というのも、この「誰か」は名前や時、場所などを特定することができないからである。間世界とは匿名の主観性によって共に構成された世界なのである。間世界に関するメルロ＝ポンティの関心は、間世界の活動を構成する匿名性の構造を明らかにすることであり、この間世界は個人の志向性と常に共有されている文化的世界との関係を含む。

上述の考えは、合理性という点から、共に構成された間世界において、どのようにして個人の志向性が匿名の志向性に関係付けられるのかという問題を引き起こす。著者によると、個人が間世界に加わるという問題は文化的始元と哲学の中心的な問題である合理性の役割について明示する。

メルロ=ポンティが中期以降、知覚についてあまり言及しなくなることを著者は指摘している。この時期から、メルロ＝ポンティは知覚の研究だけではなく、言語表現や間世界を構成している匿名性の記述を説明することに努めている。知覚の研究の結果、間世界を構成する間主観性の構造は、合理性などの現象学的説明を要する問題として示されたのである。

著者によると、メルロ＝ポンティは中期において、思考と言語は互いに弁証法的な関係にあり、両者を完全に分離することはできないと考えていた。これらの弁証法的関係は身体的志向性の活動を深く構成することによって支えられている。これは、合理性が身体によって得られる感覚を起源として成立することを意味する。そして、身体的な意味は高次元の意識活動によって拡張される。

思考と言語の弁証法は、もはや個人的な知覚経験によるものではなく、むしろ特定

の方法で共同化され、歴史化される。そのため、思考は個人的な意識の外で獲得されると考えうる。こうした考えはヘーゲルの「精神」(Geist)という言葉などで理解されてきた。しかし、メルロ=ポンティはこうしたヘーゲルの目的論的な合理性の考えに与しない。一方で、科学によって示された合理性の説明も否定的な態度をとる。というのも、科学は外的要因によって因果的に決定された思考なのだが、こうした思考には何らの抑制もない。そうした無規定な思考では合理性が成立し得ないからである。

間世界の構成という問題に対する解答は、メルロ=ポンティの思想において重要な転換となる。というのも、個別的な知覚経験において合理的な行為を見出し得ないならば、科学は合理的な正当性を定めるために他の基盤を必要とするからである。こうした問題に取り組むため、メルロ=ポンティはフッサールの思想に立ち返る。

フッサールにとって、科学と合理性に関する問題は、初期から観念的な対象に対する問いを含んでいた。それは、観念と事実の関係とは何か、といった問いである。科学が事実そのものを超えた経験事実に基づいて研究を行う限り、既に観念化されたものを含んだことになる。いかなる経験的な研究においても、思考は単に記録している事実から、記録された事実に基づいた知的モデルを創造する。個別的な事実から観念化へと移行することは、科学が主張する理性的な行為の特徴である。こうした観念化は科学においても哲学を含んでいることを示しているのである。このことから、メルロ＝ポンティの科学に対する評価は、その方法論的な思考が常にある程度、哲学的な機能を示唆していることだと分かる。たとえば、彼が初期に関心を持っていたゲシュタルト心理学は経験的な研究に基づいて哲学的含意を掘り下げようとする。こうした関心は、彼が現象学と科学の関係に対する問題として回帰することで中期においても持続している。

観念的な対象と科学における問題について、メルロ=ポンティは初期のフッサール思想ではなく、後期の記述を参照している。メルロ=ポンティによると、初期におけるフッサールの見解は事実経験から思考を完全に切り離し、それと同時に諸事実を所持する。それは、経験に基づく科学が哲学の助けを負っているため、哲学と科学の反作用や衝突を促進するのである。こうした思考の優位性は、哲学を物自体の経験に直接押し戻すというフッサールの主張と意図によって誤られてきた。哲学と科学を明確に分類することは、経験に基づく研究よりも優位であることを示せない、とメルロ＝ポンティは述べる。むしろ、こうした分類は経験に基づく研究の過程で生じるのである。そのため、哲学と科学は各々の研究において、互いに手を取り合っているのである。

上述したように、メルロ＝ポンティが哲学と科学の関係を考察するとき、後期のフ

ッサールに即しているのだが、フッサールの哲学的仕事は歴史主義や心理学を退けることにあった。フッサールによると、現象学は合理性の説明を明示する試みであり、この合理性は外部から条件付けられた諸事実の説明を用いている。そのため、科学の原理である外在性と哲学の条件である内在性を同時に考えることを可能にする方法を見出すことが問題となる。こうした方法を明確にすることや哲学と科学の適応は、中期のメルロ＝ポンティ思想に明らかな影響を与えたと著者は考えている。そして、こうした問題において両者を結び付けようとするメルロ＝ポンティの継続的な試みを見出すことができる。言い換えれば、それは科学における真理を哲学の中に結びつけることであり、つまり、条件付けられた事実が合理性をまとめるのである。一方で、哲学は外部の絶対的なものに真理を求める限り誤りである。どのような場合においても、メルロ＝ポンティは哲学と科学の親和性を与えることを求めたのである。彼にとって、現象学的方法は科学的な行為と一致するのである。

『知覚の現象学』以降、彼は哲学的関心を知覚から間世界といったものに修正した。そして、間世界を研究するため、言語に関する問題がメルロ＝ポンティの現象学的反省の中心となった。さらに、合理性を説明するため、彼は哲学と科学の関係をフッサールに依拠しつつ論じていったのである。

以上、著者はメルロ=ポンティが初期から中期の転換において、いくつかの現象学的概念を修正しつつ、知覚論から言語論へと移行したことを示した。本書はメルロ=ポンティの現象学を全体的にまとめたものだが、その大半を彼の中期思想の紹介に割り当てている。そのため、彼の思想を新たな側面から研究する手引となることが期待できるだろう。